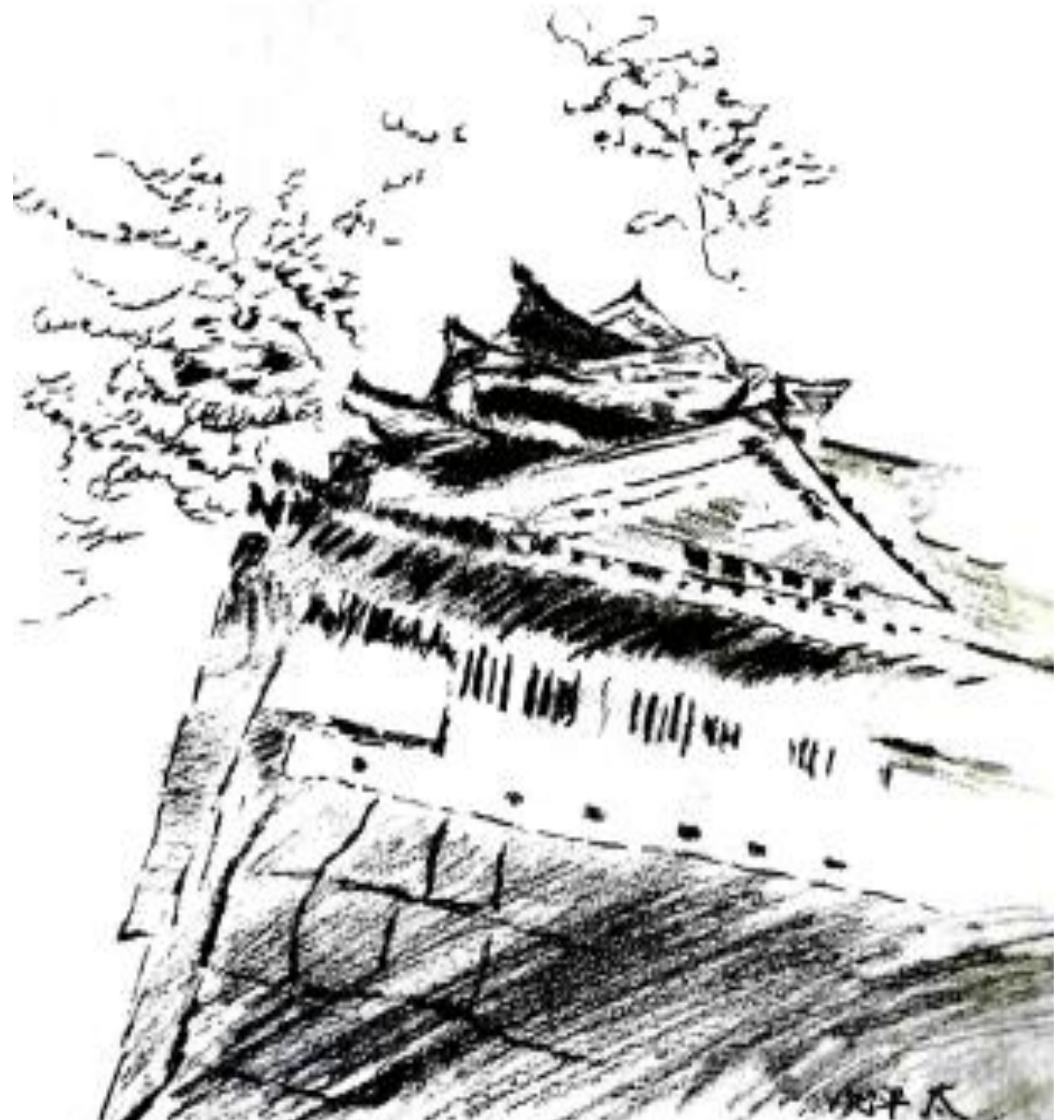


閣守天柳川

2025 年 11 月号



第30回例会 2025年10月15日(水) 投句締切分

お題 「商売」

勘兵衛 選

昼夜で商売替える大阪人
買い切れぬ値上げ商品九月末
商売人レジ打つ音が子守唄
親切と笑顔商い低い腰
常連と商売忘れ長話
ランチタイム呼び込みもあり相席も
売り物にならずに放置される犬
商談は関西弁で捲し立て
店開ける真っ白いシャツ売るために
駄菓子屋の親子で昭和令和まで
小商い薄い利益が明日の糧
ワンクリック明日に届くネットの世
お土産に月夜の蟹で玉の汗

(五客)

佳5 道頓も淀屋も立派な商売人
佳4 八百屋の子サフリーマンに憧れる
佳3 商戦があるのさ竹輪の長さに

岩原一角
信子
春田敏晴
山野寿之
久世高鷲
三枝なな
秋山加代子
松島きよみ
直子
船木しげ子
山野寿之
松谷由夏
武智三成
浜脇蓬生
林ともこ
浜知子

(三才)

佳2 安売りはしないと決めたシクラメン
佳1 どうでつかばちばちでんな腹探り
直子
堀内きみ子
人 俺を焼き商いをするたい焼き屋 平川柳
地 算盤を弾く駆け引き懐かしく 美代
天 駄菓子屋の五円で売ってくれた幸 秋田あかり
軸 値札より夢を売りたいお父さん 勘兵衛

(選評)

人の句

「俺を焼き」と恨む鯛のユーモアとクールに「商いをするたい焼き屋」の組み合わせが不思議にマッチしていて不思議な感覚を味わえる句ですね。

地の句

天の句と同じく、

デジタル時代には消えてしまった「人情の手ざわり」、数字の裏にあった笑顔や駆け引きが懐かしく思い出されました。

天の句

5円玉を握りしめて駄菓子屋へ駆けつけましたね。皆さんの心の中にある昭和、切なくなるほど懐かしい思い出ですね。

お題 「仮装」

春田敏晴 選

政治家が胸につけてる赤い羽根

遺産相続仮想通貨に惑わされ

貞子にも吸血鬼にもなつて悦

天国へ行く時はやつぱり猫で

素顔でも誰にも負けず仮装面

人を笑わすピエロの顔が泣いている

退職後化したそれからは別人

厚化粧ほんとの自分隠すため

洋服は毎日変えてますリカちゃん

アンパンマンウルトラマンも居る仮装

女装した男に惚れた木偶の坊

マスクしてサングラスかけケーキ買う

上げ底靴とウィッグも着け転びそう

(五客)

佳5 制服と愛想笑いを脱ぎ家路

佳4 兄ちゃんが姉ちゃんになる深夜二時

佳3 ソンビより妻の化粧が怖い夜

真鍋心平太

堀内きみ子

浜知子

信子

東尾由子

蔵内歳重

信子

美代

小林満寿夫

井澤壽峰

平川柳

佐野正邦

青空

浜脇蓬生

山野寿之

勘兵衛

佳2 ハロウィンに紛れてボクの負を洗う

佳1 仮装終え新しい朝やって来る

浜知子

直子

(三才)

人 風呂敷のマントチャンバラ昭和っ子

松島きよみ

地 最初で最後バニーコスプレ仮面つけ

三枝なな

天 身についた仮装で生きる黄金虫

秋田あかり

軸 何もかも仮装しているコマーシャル

春田敏晴

(選評)

人の句

風呂敷をマントー貧しさではなく、想像力の豊かさを描いた昭和の情景句。「チャンバラ昭和っ子」という締めがリズムカ
ルで温かく、消えてしまった無邪気な時代への郷愁がにじみま
すね。

地の句

「最初で最後」という決意めいた言葉に人生のドラマがありま
す。バニーコスプレという意味深な仮装と「仮面つけ」の一語
が、羞恥・挑戦・解放のすべてを包み込む前衛句に昇華させて
います。

天の句

一時の仮装ではなく、**「身についた仮装」**という表現が鋭角
です。外したくても外せない“社会的な仮面”を、黄金虫という光
沢ある殻に重ねた比喻が素晴らしいと思いました。

お題 「雑詠」

真鍋心平太 選

ついに来た自民公明仲間割れ

嫁姑輪廻転生俱会一処

どすこいがロンドン中に飮して

あの頃をのんびり語る茶が旨い

母偲びはみ出し描いた彼岸花

七弱の混乱を待つボス麻生

やつと育てたハクサイがボロボロに

人知れず逢ってひとつの影になる

人はダメメタボのサンマ許します

百歳の筆使いには哲学が

敢えて度のキツイ眼鏡で見る彼氏

鰯雲入道雲とにらめっこ

人生の喜怒哀楽を飲む傘寿

16歳ユーチューバーと笑ってる

ハムエッグからおはようのフライパン

(五客)

佳5 この星の辺境にコウロギと住む

佳4 雑談の途中の尿意目が泳ぐ

佳3 限界の筈だが本を読む噂

佳2 深呼吸そつと魂触れてくる

岩原一角

松谷由夏

勘兵衛

林ともこ

三枝なな

加山勝久

蔵内歳重

浜知子

佐野正邦

船木しげ子

波部珀兎

美代

井澤壽峰

信子

山野寿之

秋田あかり

久世高鷲

武智三成

直子

佳1 矢のように過ぎる日々にも彩が

秋山加代子

(三才)

人 世界は一つそう思う日はない麦畑

小林満寿夫

地 坊やお靴ひとりぼっちで泣いている

平川柳

天 嘘の罪神も仏も免罪に

東尾由子

軸 思うまま生き後ずさりなどしない

真鍋心平太

(選評)

人の句

平和や理想を説く言葉の虚しさを、「麦畑」という素朴な現場の風景で受け止める構成が良い。「そう思う日はない」という冷静な否定が、かえって真実味を帯びて響く。やさしい景の中に鋭い現実認識が含まれている。

地の句

子の不在を「靴の涙」で表現されたところが良いですね。愛しさと寂しさが同居し、情景が静かに心に残る。言葉を足さずに余韻が残る。これも穿ちのひとつの形かも。

天の句

嘘をつかねばならない時もあるーそんな現実を静かに見つめた句。善悪を越えて「人の弱さもまた人らしさ」なのだという作者のまなざしが優しい。

お題 「家族」

互 選

1点

運動会茶髪の家族元氣いい
終の宿看取りは他人の手にすがる
孫が来るただそれだけで元氣です
ばらばらの家族でペット大手振る
三世代集い賑わし核家族
家族より友と楽しい時間持つ
血縁は有難くとも怖いとも

父の背を追いついて越してから寂しくて
運命線ふうふで歩き風になる
雑種でも我が家の可愛家族です
老老のデジの口帰宅してヒール

次郎すら居ない昨今核家族
半世紀前には食器ダース売り
四畳半ひとつ机にあいおとと

家族愛肉を目当てに来る娘
独居家カサコソと音するタベ

元氣だといつて後回ししてしまう
所帯主以下空白の家族歴

癌が見つかった深まる家族愛
旧姓で呼ばれ我が家を思い出し
逝くときは家族に五文字アリガトウ

スマホㇿㇿ扶養家族になりました
アルバムを開くとみんな笑ってる

蔵内歳重

秋山加代子

青空

船木しげ子

井澤壽峰

久世高鷲

松谷由夏

勘兵衛

平川柳

美代

武智三成

加山勝久

加山勝久

春田敏晴

佐野正邦

蔵内歳重

浜脇蓬生

三枝なな

小林満寿夫

勘兵衛

山野寿之

船木しげ子

春田敏晴

4点

バラバラの家族集まる除夜の鐘
かあさんの号令朝のラッパ吹く
狭い庭バツタカマキリみな家族
一人だけ巨人フアンがいる家族
卓袱台を囲む団欒昭和絵図
北に向かい声の限りに娘の名前
老老の一日たまにある火花
泣き笑い生きた証は共白髪
取りあえず帰りの時間おしえてね
母となる覚悟ないまま彼岸花

美代

浜知子

佐野正邦

井澤壽峰

山野寿之

松島きよみ

武智三成

平川柳

信子

直子

東尾由子

真鍋心平太

真鍋心平太

秋田あかり

浜脇蓬生

小林満寿夫

林ともこ

8点

思春期の息子が他人の顔をする

9点

子沢山玄関の靴小競り合い

9点

煮込むほど家族になつていくおでん

9点

様々な家族のかたち茄子キュウリ

9点

家族だからこそ言えること言えぬこと

得点があるものをすべて点数順に掲載しています。

お題 「京都」短句

互選

1点 洛中避け洛外に見る京の秋

鴨川座る恋は始まる

祇園まつりへ数えきれない

京の町並み舞妓絵になり

線香もバジルも京都の香

西京漬けを朝刊で買う

独り気ままな京巡る旅

さくらはらはら散ります恋も

京の風情を壊す観光

和服が似合う京の町並み

舞妓さんからようおこしやす

秋の京都も画布は真つ赤に

芋と棒鱈京のいもぼう

時代まつりで京都にぎやか

千枚漬けのニユース流れる

哲学の道その時の彼

田の字の中で出遭う平安

南座招き今年も暮れる

癒しを求め巡るは京都

憐れ信長本能寺の変

京都の小道インバウンド行く

燃えよ我が剣夢のあとさき

奈良はまほらば京都は都

京都五山に南禅寺豆腐

天龍寺にて龍を追いか

舞妓の姿歩く芸術

はんなり求めお座敷遊び

インバウンドが清水闊歩

加山勝久

直子

信子

波部珀兎

秋田あかり

武智三成

東尾由子

春田敏晴

浜知子

林ともこ

船木しげ子

浜知子

蔵内歳重

船木しげ子

三枝なな

信子

直子

松島きよみ

堀内きみ子

波部珀兎

久世高鷺

真鍋心平太

蔵内歳重

井澤壽峰

青空

東尾由子

堀内きみ子

松谷由夏

4点

京都弁なら皮肉やんわり

京都慕情三味線宙を舞う

早よ帰りなとぶ漬けどうえ

東寺菩薩に君の面影

京の雅に奈良の侘寂

春秋越えて哲学の道

金閣の庭秋の影落ち

花のいのちの寂庵法話

京都鴨川恋が芽生える

諸行無常の鐘がなる古都

遠い昔の竹林の恋

壬生菜 賀茂なす かぶ聖護院

轍が駆ける嵯峨の竹藪

祇園の雨ににじむぼんぼり

ゾンビも帰る五山送り火

11点 底冷えの京都にある矜持

林ともこ

小林満寿夫

山野寿之

平川柳

山野寿之

真鍋心平太

久世高鷺

平川柳

井澤壽峰

秋山加代子

青空

三枝なな

美代

春田敏晴

勘兵衛

秋田あかり

今月の投句者（29名 敬称略 太字は初参加の方です。）

三枝なな

信子

小林満寿夫

春田敏晴

林ともこ

浜脇蓬生

美代

秋山加代子

皆様ご参加、ご協力ありがとうございます。

久世高鷺

加山勝久

山野寿之

東尾由子

武智三成

直子

蔵内歳重

井澤壽峰

勘兵衛

岩原一角

松島きよみ

波部珀兎

真鍋心平太

青空

佐野正邦

堀内きみ子

平川柳

松谷由夏

浜知子

秋田あかり

船木しげ子

川柳天守閣 連載 評論「現代川柳の詩学」を考える ②
有島武郎の『ホイットマン詩集』と民衆詩人三石勝五郎
十八世川柳宗家閑成庵川柳 平 川柳（東京川柳会主
宰）

大正文学とホイットマンの関係を考える時、
有島武郎のホイットマンの紹介は、なかでも最
も重要なものです。日本におけるホイットマン
の受容の頂点にるのが文学者の有島武郎で
す。有島武郎のホイットマンの受容は自己の文
学形成に大きな影響を与えたばかりでなく、大
正時代の文学者たちにも多大な影響を与えまし
た。

有島武郎はアメリカに留学中の一九〇五（明治三
十八）年三月、ボストンの本屋でホイットマンの『草の
葉』の原書を購入し、読んでいました。帰国後、有島武
郎は一九〇七（明治四十）年十二月、東北帝国大学農科
大学（旧札幌農学校）の英語講師となり、翌年一月に着
任。一九〇八（明治四十一）年に有島武郎は大学の講義
でホイットマンの『草の葉』の詩を取り上げました。こ
れは大学の教室でホイットマンの詩を取り上げた嚆

矢といわれています。

一九一四（大正三）年十一月、有島武郎は農科
大学を辞し、同年の暮れから翌年の九月まで鎌倉
に居住。その後、東京の麹町に居住し、生活する
ことになりましたが、一九一九（大正八）年四月
から同志社大学英文科の非常勤講師となりました。
担当は「近代文学」でした。翌年の講義で有
島武郎はホイットマンを取り上げました。

大正八年五月に有島武郎は『抒情文学』のホイ
ットマン生誕記念号に彼の詩「涙」(Tears)と他
一編を訳出しました。

一九二一（大正十）年十一月に有島武郎は『ホ
ヰットマン詩集』（第一輯）を叢文閣から出版し、
一九二三（大正十二）年二月には、同第二輯を出
しました。この二冊には六十三篇のホイットマン
の詩が収められています。

亀井俊介は有島武郎の一九二〇（大正九）年
三月に刊行された評論『惜しみなく愛は奪ふ』は、
ホイットマンの「直接的影響の産物」であると

『近代文学におけるホイットマンの運命』で述べています。

また有島武郎は晩年のホイットマンの詩「死の歌」の影響を強く受けています。大正十二年六月九日、有島武郎は信州軽井沢の一室で『婦人公論』の記者で人妻の波多野秋子と心中しました。

この有島武郎の〈死〉は「大正デモクラシー」の終焉しゅうえんを象徴しています。

剣花坊が『川柳を作る人に』でホイットマンを取り上げる契機を作った人物は、この著書の巻頭文の結語で語られている「民衆詩人 三石勝五郎」でした。

民衆詩人の三石勝五郎（一八八八・一九七六）はこの頃、南北社の社員で剣花坊の『川柳を作る人に』の編集担当者でした。

三石勝五郎は一九一三（大正二）年七月に早稲田大学文学部英文科を卒業。早稲田大学在学中に勝五郎はホイットマンの詩集『草の葉』に触れ、

その「ローファー」（放浪者）としての生き方とその〈詩精神〉に深い感銘を受け、その後、ホイットマンのように放浪生活の中で詩作に熱中していきます。

一九一五（大正四）年七月、勝五郎は朝鮮半島に渡り、「釜山日報」の記者になりますが、翌年は病気のため、帰国します。

療養後、一九一七（大正七）年五月、勝五郎は東京の南北社出版部に入社します。翌年四月、勝五郎は竹馬の友三石元茂の詩集『びーどろ』（東雲堂書店）の「序」で「自然」を題材に「生命のリズム」によって創作する元茂の詩の特色を述べていますが、この特色はそのまま勝五郎の詩の特色でもあります。

勝五郎は一九二三（大正十二）年には詩集『散華樂』を刊行し、一九二四（大正十三）年には『火山灰』を刊行します。『散華樂』には多くの「短詩」が収録されており、そこには勝五郎の人生観が「短詩」によって表白されています。（続く。）

「ポストフクヤマの思想」

真鍋心平太

一九九〇年代初頭、フランス・フクヤマは『歴史の終わり』という刺激的な書を世に出した。冷戦が終わり、世界はようやく自由と民主主義という理想の地平にたどり着いたと、多くの人が信じた時代だった。彼の言う「歴史の終わり」とは、戦争や事件の終焉ではなく、人類が政治的進化の果てに「最も合理的な体制」に到達した、という意味だった。

だが三十年を経たいま、私たちはその「終わり」の向こうで新たな混沌に立ちすくんでいる。SNSの熱狂、市場の欲望、AIと遺伝子操作が神の領域に踏み込む科学の暴走。ユヴァル・ノア・ハラリが『ホモ・デウス』で語ったように、人間は幸福と不老さらに不死を求めて「神」になろうとしている。自由を得たはずの人間が、自由の重さに耐えかねて自らを見失いつつあるのかもしれない。

フクヤマの描いた「終わり」は静かな完成ではなく、むしろ新しい「始まり」だった。自由民主主義は制御を失い、地球の環境を損ない、人の心を疲れさせている。「自由」とは本来、責任や節度と共にあるべきなのに、いまや際限なく解放たれ、止まるところを知らない。

だからこそ、次に求められるのは、自由を支える新しい思想だと思う。生命中心の倫理、テクノロジへの節度、利潤よりも幸福を指標とする経済、そして孤立を癒す共同体の再生。そうした「ポスト・フクヤマ」の思想が、静かに芽吹き始めている。

歴史は終わらない。終わりを宣言したその瞬間から、また別の問いが始まるのだ。自由の先に、私たちは何を選び、どんな未来を詠むのか。その問いこそが、いまを生きる詩人や川柳人に与えられた新しい使命なのかもしれない。ウェブ川柳天守閣もその一翼を担いたいと思っている次第である。

第31回 ウェブ川柳天守閣 ご案内

お題 「余白」 平 川柳 選
「マスク」 浜 知子 選
「瞬間」 互 選
「雑詠」 真鍋心平太 選
「ループ」(短句) 互 選
(投句 各 2 句)

投句料 3 回につき 1000 円

(請求書メールが届いたらお支払い下さい。)

投句開始 2025年11月9日(日) から
投句締切 2025年11月15日(土) まで
互選投票 投句締切後下記の期間内に投票して下さい。
11月16日(日)～11月19日(水)
披講発表 11月20日(木) から随時閲覧可能になります。

左記の投句、互選投票、結果発表の閲覧は
下記 URL から可能です。

<https://tensyukaku.com/>

投句、互選投票は会員登録が必要です。

会員登録は下記 URL より

https://tensyukaku.com/id_make.php

スマホは下記 QR コードから



投句・閲覧



会員登録



フォト川柳

クリックで拡大

(事務所)
〒 520-0054
滋賀県大津市逢坂一丁目8-1
サンルシエル大津607号室
川柳天守閣
Tel・fax 077(532)4211
携帯 080(2672)4446

二〇二五年十月二十五日発行
ウェブ川柳天守閣会報
(発行責任者 真鍋心平太)
(編集人 真鍋心平太)